 Copyright：Takumin

参考書の紹介。ここは省略。
実働部隊の確認。

暮らしの中の国際政治学。これは新しい個体ができて、ローカルなシェアがあって、段々グローバルなシェアになってきて、かなりこじつけもあるが、国内政治を学ぶ上ではこのような自分の身の回りの人生観みたいなもののアナロジーで国際政治を見るという図である。こういう図がないと頭の中に入らないということで配った。

次の図は、国際政治学には大きく三つのパラダイムがある。社会学でいうと四つに区切られた四角の隅を AGIL という。AGIL というのは、A は adaptation、I は integration、L は latency、G は governance。というようにサルコットというアメリカの社会学者が社会システムという本でいった。ここは四つの話が入っている。この間にお互いに関係がある。社会学の場合にはあまり入れないで、バッテンの関係、隅に AGIL というのがある。これはどういうことかというと、社会にはソーシャル・トランザクションというのがある。これはどういうことかというと、adaptation というのは経済、integration は社会の文化機能、governance というのは政治機能、latency というのは世帯。どういうことかというと、社会というのは形態、その外の世界にアダプトしながらやってくる機能を持っている。つまりこれは機能が AGIL みたいになっている。I というのは例えば、何かの秩序みたいなものある。それは integration のような役目がある。例えば慶應義塾の人達は早慶戦などでよく歌を歌う。そういうようなものでお互いに自分たちはインテグレイトしているのである。自分たちは全体としてまとめてインテグレイトしている。それを integration という。I、文化というのは、そういう人々がインテグレイトする役目がある。経済は分かるよね。経済というのは外のものに社会が環境をしていって、そこから富みたいなものを得ている。それを adaptation という。じゃあ latency というのは何かというと、皆さんが卒業すると、慶應義塾が終わるわけではなくて、慶應義塾にどんどん学生が来るというのが latency。慶應義塾を社会だとすれば、その構成員が常にいるということが latency。つまり、これで社会が終わるのではなく、常にその社会が持っている AGIL ような特徴を持った社会というようなものが支えているというためには世帯がなければならない。なので、暮らしの中の国際政治学の中でも、そういうニュアンスが入っている。結婚をしない場合子供ができない。

そういう場合、永続的なものはないが養子をもらったり他の人は結婚して子供を産んだりするということになれば、その社会のコミュニティの構成員は常に同じような文化の教育を受けながら育ってゆく。governance というのは政治なので、どういうことかというと、権力というものがあって、つまらない本には権力について、全員に富みたいなものを分配できなく、政治的に誰に渡すかを決めなければならないという状況で、それを分配する力だという風に言う人がいる。先生は余り好きではない。なるほどなと思うかも知れない。例えば誰かを主将にするときに、その「富」は首相というポストなのである。全員に主将を渡すわけにはいかない。すると前の主将が指名するときに、そのリソースを渡すというときに構成員がいいよというならば、そこに前主将に主将を決める権力のパワーの源泉があるという。なので、「富」というのは経済的な財だけでなく、あるポストなどを自分自身があげられる、構成員にそれに対してうんと言わせられる、そういうものが政治的な権力なのである。これはロバートダールという人がいったことである。ある人に誰かがアポイントする、それにみんなが従う、するとその人の権力は最大で１という風になる。つまり１００％。その中で１００人の構成員がいて反対が１０人していたとすると、その人の権力は９割であるという。だから、権力というのはスケアスリソースを分配する力というように書かれているが、それは全く嘘で、権力というのは今いったように、誰かがこういう風にするんだと決めたときに、周りの人がそれに賛成する%の数なのである。権力というのは全体の構成員の中で物事を決めるときに、その構成員がどれだけ従ったかで決まるのである。

これは正確に言うと、例えばみんなが中学の時に両親に１０回勉強しろといわれた。そのうち５回勉強した。するとお母さんの政治力はどれくらいかというと、５０％である。しかし、その中で自発的に勉強した可能性もあるのでそれは差し引かなければならない。じゃないとお母さんの権力は計算できない。お母さんが何も言わなくても自発的に１０回勉強したとすれば、勉強したことに関するお母さんの権力は０なのである。何も言っていないので。しかし、１０回言ったという前提で、その内の７回勉強したとか言うことになると、お母さんの権力は７０％ということになる。そのときに、自分が自発的に勉強した数を引かなければならない。すると正確な権力が出てくる。権力というのはそういうものである。通常我々が言っているような権力と非常に近い。つまり誰かを強引にこういうふうにしろといっているときに、自分は嫌だなと思ったが、実際にそれに従った人の数で表す。今日覚えてもらいたいのは、権力というようなものは計測することができる。測られない権力は兼職ではない。とすると、スケアスリソースを分配するということに関しても、それにみんなが従うかによって権力はお互いに定義できる。政治学で、スケアスリソースを

分配する能力が権力だという風に言っているが、それだけでは十分条件ではなくて、十分条件はそれが計測できるのだということなのである。
そういうことで、権力というようなものが社会には必要であり、governance が必要である。それから文化で integration が必要である。これはある意味では四つの AGIL。学問的に言うとどうなるか。governance は政治学。latency は社会学。adaptation は経済学。integration は文化系の学問。

さっきの四角形の話に戻る。先生の書き方。国民国家から出発して相互依存、勢力均衡、ヘゲモニーという感じで時計回りになる。国家というようなものは最初、よく言われるのが１６１８～４８まで３０年戦争があった。それはハプスブルグ家に対する新教徒の権力闘争であったといわれている。この中で国民国家というものができた。国民国家というのは nationstate というように言われている。nation というのは国と言われている。state も国である。では国国かというとそんなことはない。日本語の訳は国民国家と言うようになっているが、今までどういう風に国民がいたかというと、帝国の時代があって、例えばハプスブルグ帝国があった。これはウィーンを中心にしたカトリックの国。スペインというのは大きな分家。イギリスは北がカトリックで、イングランドが新教。なのでスペインの無敵艦隊・カトリックが英国の国教会を潰すために占領しに行った。それで無敵艦隊がいたのだが、台風などの理由でダメになった。これはオランダも新教の国。カトリックはお金を稼ぐというということは汚いことだという考えがある。なのでお金を儲けるのではなく、そういうのは差し出して施すものだという。しかし新教はそういうことに反感を持って、お金を稼ぐと言うことは宗教的に間違いではないということを主張して、帝国の支配に対する反発もあり戦いが始まった。これが３０年戦争。そういう中で、国民国家という名前は、これは民族なのである。スコットランド人なのか、アイルランド人なのか、という呼び方である。民族がヨーロッパにおける民族がそれぞれ独立して国家を作ったのだという意味の国民国家である。だから、帝国というのはすべての民族を含んでいる。それぞれの民族が分派行動をする。今もそうである。パレスチナやチベットなど。そういう意味で、国民というのは国があって民族があるのではなく、そもそも土着的な領域があってそれが国家を作る。そういう意味が国民国家なのである。今では法的な言葉になっているがここでの国民国家の意味はこうであり、段々国民国家が出来上がってくる。すると、ハプスブルグ家が崩壊するのだが、その後どうするのかというと、それぞれ国がばらばらに興ってくるが、例えばオランダは商人の街、イギリスも独立、色んなところでみんなが独立していく。するとそういう国家はお互いにまだ弱いわけだから、貿易をしたり連合した

りすることで、国家を支える税を取らなければならない。すると税は、商売として経済として adaptation することで富をつくってゆく。すると国と国が連合を始める。お互いに連携を始める。こういうようなものが普通相互依存論というのである。相互依存するということは、お互いが一緒に連携することによってメリットがあるという前提で国家と国家が連合してゆく。それがいわゆる相互依存なのである。お互いに独立して国家が出来上がってくるが、お互いに公益をやったり関税を取ったりしていく。それがお互いに連携を採るようになる。すると軍事的な連携や経済的な連携。相互依存した国民国家がくっついてゆく。これが相互依存の世界。ところが相互依存していると何が起こるか。お互いに知らなかったが相手の方が力があるなということが分かり、何かのきっかけで損得が明らかになってくる。そうなると段々リンクしていたものの中にかなり力を持ってくる人達が明確になってくる。財力やものを決める力などね。相互依存には脆弱性がある。みんなが友達でやるというのは良いのだが、だんだん相互依存を切ろうかという気持ちになってくる。これが脆弱性。つまりリスクが出てくる。するとみんな相互依存を切り始める。しかし強い人間が現れる。するとこれを中心に相互に、今度は相互依存関係ではなくて、お互いに力の関係で結びつく。権力の関係で結びつく。こういうようなものが色々できてくると勢力均衡が形成される。始めは何も知らずに相互依存関係を送っていても、段々その中で力のあるものと力のないものが明確になってくる。すると力のあるものと衛生国家がくっついて、そういうものがお互いにハードパワーをベースにして緊張関係を持つ。そういうものが勢力均衡である。するとだんだん軍事力や色んな面でこっちの方が強いということになってくる。するとヘゲモニーのような世界が現れてくる。ヘゲモニーとは周りの人に財を提供して自分に従うようにするということをやる。つまり、覇権国の財が豊かであればいいのだが、段々抵抗勢力が出てくる。歴史的にいえば、大英帝国にとってのアメリカのような存在。イギリスから分派して独立していく。これに対してイギリスは戦争を仕掛けてそういうことをしてはいけないという風にやるのだが、負けてしまう。と同時に、フランスが当時イギリスと戦っていたが故に、フランスがアメリカを助ける。つまり、フランスが持っている武器の技術をアメリカに提供する。こういう風にして、アメリカが急激に台頭してくる。すると大英帝国は取って代わられる。現在はアメリカだけが残った。しかし、アメリカは現在別のところで弱くなっている。イラクに対して財を投入するのだが、それに対して疲弊してくる。それから一方ではアメリカが経済的に強いから覇権を持ていたのだが、サブプライムローンといって、安い金利で中低所得者層にお金を貸した。アメリカがどうしてお金を貸したのかというと、アメリカが確実に住宅の値段が上がっていたからだ。アメリカの経済を見るときは住宅の価格がベースになっているのだが、それがサブプ

ライムローンによって安い住宅なので、住宅の価格が上がってこない。ということは、ローンを借りた人達が借金を返さない。それに対してお金を貸した会社がつぶれていく。その会社に貸していた銀行は焦げ付く。そういうことがあって、世界中全部不況になった。
すると、覇権も長く続かないということが分かる。また、もう一つ違う覇権が出てくるのかも知れない。先生は、こういうぐるっと回る世界からいうと、国民国家ができて、相互依存から始まって、勢力均衡が出てきて、ヘゲモニーな世界が現れて、それが崩れ始めるとまた新しい国家像が出てくる。ソビエト崩壊後はその中で新しい国家ができているので例としてあげられるが、世界全体としての流れではこういう現象は見えていない、なので仮説のモデルなのである。
こういう離散集合のパターンで見るのは、企業がつぶれてまたできてみたいなものが身の回りにたくさんある。それが実は国家の離散集合と基本的には同じであるということを話した。